

鈴木有郷牧師説教

6/19/2011

教会の基盤 コリント人への第2の手紙 13:5-13

主イエスのメッセージは世界を変え、歴史を変えました。しかしその伝道の領域は、ガラヤ地方とエルサレムに限られていました。キリストの福音を小アジア、ギリシャ、そしてローマにまで伝えたのはパウロです。

パウロが立ち上げた教会の一つがコリントの教会です。コリントはエーゲ海に面したギリシャの大都会で、ギリシャ人だけでなく、当時から多くのユダヤ人が住んでおり、伝道・宣教には最適な土地でした。

パウロの指導の下、初期のコリント教会は大いに勢いを伸ばし、メンバーも多く、最も成功した教会として知られたようです。しかし、その教会が分裂の危機に見舞われることとなります。あることを巡って教会員の間に仲違いや確執が起きたのです。

その原因を造ったのは、世俗化したクリスチャンとパウロが呼ぶ人達でした。彼らは、長老や執事を選ぶ尺度を、見た目の良さ、通りの良い声、社会的地位、雄弁に求め、福音の深い理解や、祈りに基礎づけられた生活等は二の次だと主張したのです。

それに加えてパウロを憤らせ、悲しませたのは、彼らが礼拝を大切にしなかったことでした。彼らの中には、自分はキリストによって救われているのだから、礼拝や祈りは必要なしと考える者もいたのです。

パウロの悲しみや怒りの程はコリント人の手紙に明らかです。「私はあなたがたがたのことを聞いてどうしてよいか分からない。私の心は乱れ、私の目は涙が尽きない。」

このコリントの教会を巡るエピソードは、私たちに何を教えてくれるのでしょうか。礼拝なくして信仰なし、これです。礼拝なくして信仰は維持できない、これです。酸素がなければ、私たちは生きることができません。それと同じように、礼拝なくして信仰は死んでしまいます。この事に関して、パウロは一切の妥協を許していません。

私が5年前に日米合同教会に赴任した時、この教会にまつわるある不幸な事実を知りました。教会年次総会の日曜日に、必ず何人かの人が、礼拝の最中に下の社交室に集まり、いかにして自分たちの考えを通すことができるかに関して作戦を練るのが常であった、ということです。

もしそれが事実なら、パウロは日米合同教会のために心を乱し、涙を流したに違いありません。勿論現在では、そんなことはありません。しかし、一人一人が常に気をつけないと、同じ落とし穴は、大きな口を開けて私たちを飲みつくしてしまわないとは限らないのです。

例えば、私たちが委員会の仕事に礼拝以上の重きを置いたり、礼拝なしで交わりだけを楽しんだり、教会の活動を礼拝なしでしようとする時、パウロを悲憤慷慨させた世俗化したクリスチャンの轍を踏んでいるのは明らかです。

礼拝なくして信仰なし。そうパウロは主張しました。しかし彼の主張はそれに終わっていません。彼の手紙にはもう一つの重要なメッセージが書かれているのです。「神は差別をなさらない。」つまり、神は教会外の価値観を教会の中に持ち込み、結果として礼拝しない教会を造り上げている世俗化したクリスチャンをも同様に愛しておられる。そうパウロは主張するのです。

神は祈り、賛美し続ける人々を喜ばれると同時に、もう一つのグループに、聖なるものを仰ぎ見て生きる喜びを体験せよ、と忍耐強く呼びかけておられるということです。

以上のことから、私たちは教会に関する二つの重要な点を確認することができます。教会とは一つに礼拝する者達の信仰共同体です。そして二つに、教会は葛藤や確執を乗り越えて和解しあう、赦された罪人の信仰共同体です。

パウロは記しています。「神はこの世をご自分と和解させられた。神は和解のメッセージをあなたがたに託された。あなたがたは、キリストの使者となるように召し出されている。」

忘れてならないのは、この言葉はパウロに忠実であった人々だけに与えられたものではないということです。あんなに彼を苦しめた世俗化したクリスチャンにも与えられているのです。

神は私たち一人一人を、土の器として、摂理の道具として、キリストの使者として用いられるのです。私たちの中で無視されている者は一人もいないのです。一人も、です。